一　般　演　題　抄　録

13. 非定型抗精神病薬により一過性高CK血症を合併したパーキンソン病の3例

西郷和真　錦野真理子　阪本　光　高田和男　三井良之　楠　進
近畿大学医学部内科学教室（神経内科部門）

近年，抗精神病薬の中でも非定型抗精神病薬（セロトニン2・ドーパミン2受容体選択性薬剤－5HT2/D2拮抗薬）の使用頻度が高まっているが，当院において同薬剤内服中に発症した一過性高CK血症を合併したパーキンソン病の3例を経験した．症例1は73歳男性，平成8年にヤール2度と診断．平成15年に幻覚等精神症状が出現したためquetiapine内服を開始．約1ケ月後になり突然の発熱，入院精査にてCK 6019と上昇を認め悪性症候群と診断した．症例2は65歳男性，平成9年にヤール2度と診断．近医精神科よりquetiapine，risperidoneを投与された後CK 987まで上昇した．症例3は65歳女性，平成6年にパーキンソン病と診断．平成10年幻覚等精神症状が出現したためrisperidoneを内服中にCK 669まで上昇した．3症例とも補液により症状は改善した．同時に検討した当院当科における過去5年間の一過性高CK血症として治療が必要であった11例の検討では，非定型抗精神病薬によるものが3例，原因不明のものが3例，抗パーキンソン薬の変更中止によるものが2例，感染によるものが2例，その他1例であった．また悪性症候群の診断基準として一般的に使用されるLevensonの診断基準を満たしたものが11例中9例であり，診断基準を満たさなかった残り2例はどちらも非定型精神病薬内服中に発症したものであった．従来からのフェノチアジン系薬剤にくらべて5HT2/D2拮抗薬の副作用報告例，特に悪性症候群の発生頻度は少ないとの報告が多いが，本3例のように突然CPKが上昇する例もあり，その場合には悪性症候群の診断基準を満たさない発熱，筋固縮を欠いた非定型な病像を呈することがあり，注意が必要である．本3例と合わせて一過性高CK上昇とパーキンソン病の関連につき文献的考察を加えて報告した．

14. 当院における99mTc-HMPAO SPECTのNormal Database作成の試み

花田一志　切目栄司　大賀征夫　田村善史　人見一彦
細野　眞*　足利竜一朗*　柳生行伸*　西村恭昌*
近畿大学医学部精神神経科学教室　*近畿大学医学部放射線医学教室

目的　脳血流SPECT検査において，解剖学的標準化や画像の統計的処理は様々な疾患の早期診断や経過観察に必要不可欠なものとなりつつある．統計的処理を行う際にNormal Database（ND）を使用するが，これは撮像機器に依存すると言われており，微細な変化の抽出や検定において独自のND作成が必要となってくる．現在当院においては独自のNDはなく，他施設で作成されたものを流用して用いている．今回，当院独自のNDを作成し，その有用性を検討した．

方法　当院で施行された^{99m}Tc-HMPAO SPECTの中から，痴呆性疾患，脳血管障害，脳外科の手術歴，10年以上の糖尿病の罹患などの疾患が否定された症例と，パトラック法による脳血流量が極端に低下している症例，脳血流量に左右差が認められる症例を除外したものを対象とした．これらを各年齢群（55～60歳，61～65歳，66～70歳，71～75歳，76～80歳）に分類した．それぞれの群でLeave one out法により特異な血流パターンの症例がないことを確認し，年齢別のNDを作成した．

結果　Leave one out法により，5標準偏差以上の乖離が見られる領域があるものと，2標準偏差以上の乖離が広範囲で見られる症例に対して，再検討を行い解析対象から除外した．65歳の多発性脳梗塞の症例に対して，新しく作成したNDと，従来当院で使用している他院のNDの両方で解析を行った結果，血流低下範囲は同等に描出されたが，脳下面に認められたアーチファクトが新しいNDで解析を行ったものでは消失していた．

結論　独自のNDを使用することでアーチファクトの軽減が認められたため，より正確な診断，解析が可能であると考えられる．今後その精度を増すために，ND作成のための症例数の追加，男女別のNDの作成を考慮し，新しく作成したNDの有意性の検討を行っていきたい．